京都大学教育研究振興財団助成事業
成　果　報　告　書

2024年4月4日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会 長　藤　　洋 作　様

所 属 部 局　人間・環境学研究科

職　　名　教授

氏　　名　辻 正博

助成の種類	**令和5年度　・　研究活動推進助成**		
申請時の科研費研究課題名	唐史基本典籍の史料批判的研究―『冊府元亀』『唐会要』『資治通鑑』唐紀を対象として		
上記以外で助成金を充当した研究内容	副題に列挙した史料のうち『唐会要』に対象を絞り、史料批判・校訂本の作成について試行的な研究を行った。助成金はそのための諸経費（史料取り寄せおよび調査のための旅費、史料購入費用など）に充当した。		
助成金充当に関わる共同研究者	（所属・職名・氏名）		
発表学会文献等	（この研究成果を発表した学会・文献等） 唐代における潼関の立地と機能（2024年5月25日開催の第68回国際東方学者会議関西部会にて講演予定）		
成果の概要	**研究内容・研究成果・今後の見通しなどについて、簡略に、A4版・和文で作成し、添付して下さい。（タイトルは「成果の概要／報告者名」）**		
会計報告	交付を受けた助成金額	10,000,000 円	
	使用した助成金額	10,000,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	費目	金額
		旅費	453,665
		謝金	126,000
		資料複写費	413,075
		書籍購入費（物品費）	7,260
当財団の助成について	（今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。） 貴財団の研究活動推進助成への申請が、2023年度の科研費申請書類（研究計画調書）を見直す良い機会となりました。いただいた助成金により、ブランクなく所期の研究を継続できたばかりか、2024年度の科研費を獲得することができました。科研費への応募は、特に文科系の場合、基盤研究のCからB、BからAへと規模を大きくする方向で継続するとは限りませんので、貴財団が実施しておられる助成は本当に助かります。今後とも継続していただきますようお願い申し上げます。		

研究成果の概要

【研究内容とその成果】

唐王朝の諸制度は、遣唐使等を通じて古代日本にもたらされ「律令制」の形成に大きな影響を与えた。唐の制度をきちんと解明することは、古代日本および当時の日中両国の文化交流に対する理解を深める上でもきわめて重要である。ところが、唐史研究の基本となる典籍の中には、校勘が不十分なままに世上に出回っていたり、編者の偏った視点に留意しないままに利用されているものが散見される。

こうした問題を解決すべく、2023 年度の科研費補助金を申請したが、性質の異なる 3 種の典籍（『唐会要』『冊府元龜』『資治通鑑』）を対象としたためか、こちらの「学術的な問い」がうまく伝わらず、期待した評価が得られず不採択に終わった。

そのため、このたびの研究では、研究対象を『唐会要』1 つに絞り込んだ。『唐会要』100 巻は、他の典籍には無い独自の記事を多く含み、唐史研究のみならず日本律令制研究の分野でも頻繁に参照される重要典籍の一つである。ところが、この典籍については、従来きちんとした校勘作業が行われておらず、その結果、『唐会要』の通行本テキストは、多くの深刻な問題を含んだまま、広く流布するに至っている。20 世紀末以来、世界各地で研究資料の公開が進められた結果、『唐会要』のテキストが重大な問題をはらんでいることについては、一部の研究者により認識されるようになったが、テキストの全面的な校訂がなされるには至っていない。つまり、研究者の大半は、通行本『唐会要』のテキストが深刻な問題をはらんでいることに気づかないまま、『唐会要』を利用し続けているのである。

このたびの研究は、この問題を解決する糸口を見出すべく、『唐会要』のテキスト校訂を部分的に行い、次年度科研費獲得のための足がかりを形成することを目的とした。主たる研究作業は、

❶資料整理およびテキスト校訂作業（若手研究者 1 名を補助者として雇用し、2 名で実施）

❷校訂の対象となる資料を調査するため、国内・台湾の図書館に出張

であった。成果としては、『唐会要』全 100 巻のうちの 2 巻について基本的な校訂作業を終えることができた。

【今後の見通し】

この研究助成による研究が基礎となって、2024 年度から 3 年間、科研費補助金を獲得することができた（基盤研究（B））。研究代表者のほか研究分担者・協力者総勢 7 名による共同研究であり、校訂本『唐会要』の作成という大きな目標を何とかクリアできるのではないかと考えている。本研究助成により作成できた校訂テキストが出発点（たたき台）となる。